

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370304

研究課題名(和文) イギリス社会における群集の変容とモダニズム小説の勃興

研究課題名(英文) The Transformation of the Crowd in the British Society and the Rise of Modernist Novels

研究代表者

伊藤 正範 (ITO, Masanori)

関西学院大学・商学部・教授

研究者番号：10322976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：イギリス19世紀～20世紀初頭の小説テキストにおける群集表象に着目し、当時の社会における群集のあり方の変遷が、モダニズム文学の発生・発展とどのような関連を有していたのかを探った。主な成果として、Wells, *The Invisible Man*の終末部に現れる労働者の群集、Hardy, *Jude the Obscure*における祝祭日の群集、さらにはConrad, *The Nigger of the "Narcissus"*におけるロンドンの群集を、当時のLe Bonなどによる群集理論と照らし合わせながら分析し、新時代の群集への変遷が、当時のフィクションの言語に多大な影響を与えていることを見出した。

研究成果の概要(英文)：With focus on the representation of crowds in contemporary novels, this research investigated the relation between the transformation of the crowd in the nineteenth- and early twentieth-century British society and the rise and development of modernist literature. The chief achievements consist of discoveries concerning the group of workers appearing at the close of H. G. Wells's *The Invisible Man* (1897), spectators of festivals from Thomas Hardy's *Jude the Obscure* (1895), and the mass of people filling London streets from Joseph Conrad's *The Nigger of the "Narcissus"* (1897). By referring to Gustave Le Bon's crowd theory, I discovered that the formation of new crowds boosted by the popularization of newspapers had a great influence on the contemporary fictional language.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス小説 群集 労働運動 初期モダニズム ジャーナリズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来のモダニズム小説研究において「個」のあり方に注目する試みは、Dennis Brown や Michael Levenson を始めとする多くの研究者によってなされており、例えば「解体・断片化する自己」「疎外される自己」等の定式化がかなりの程度進行していた。しかし、モダンという時代を規定するものとして、「個」と並び重要なファクターである「群集」については、これまでのところ体系的な研究があまり進んでいなかった。

(2) 19世紀末から20世紀初頭にかけての群集の様態と、モダニズムの発生・発展との関わりに注目した少ない先行例には、Patrick Collier, *Modernism on Fleet Street* (Ashgate, 2006)、Mark Wollaeger, *Modernism, Media, and Propaganda: British Narrative from 1900 to 1945* (Princeton UP, 2008) などの研究が数えられる。だが、いずれもポピュラー・メディアの発達を通してモダニズム文学が大衆とどのような関係を結んでいたかを論じるものであり、本研究のように文学テキストにおける群集の表象そのものに注目するものではない。

(3) Michael Tratner, *Modernism and Mass Politics: Joyce, Woolf, Eliot, Yeats* (Stanford UP, 1995) は、Le Bon の群集理論とモダニズム文学との関連を探るという点において、本研究と関心を共有しているが、モダニズム文学が群集心理のイデオロムを用いて大衆と親密な関係を取り結んでいたという議論には、やはりテキストにおける群集表象そのものへの関心が欠如している。

2. 研究の目的

(1) 本研究は19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリス小説における群集の表象に注目し、その変遷に、モダニズム運動の発生・発展を定義づける新たな鍵を得ようとするものである。その際、同時期における労働運動の活発化や、それに伴って生じた労働者の政治的影響力の変化を視野に入れることにより、社会における群集の位置づけの変遷と、モダニズム文学登場との関連性を立証することを狙う。

(2) William Morris、Thomas Hardy、H. G. Wells、Joseph Conrad などによる1890年代以降の小説作品では、19世紀半ばの小説テキストとは異なるタイプの群集が登場する。具体的には、Wells, *The Invisible Man* (1897) における社会的脅威を打倒する暴徒、あるいは Hardy, *Jude the Obscure* (1895)、Conrad, *The Secret Agent* (1907) における、個々の登場人物の生を巡るプロットから乖離した

群集のことである。こうした群集は、一見して Dickens, *Barnaby Rudge* (1841) や Gaskell, *North and South* (1855) などに登場する、単純な「混乱」や「狂気」としての群集とは一線を画するものとして現れる。後者における群集が Le Bon の群集理論において定義されるような「退化」した集合体であるのに対して、Morris の群集は社会の刷新を達成するための爆発的な力であり、Wells の群集は既存の社会を保全するための管理された力であり、また、Hardy や Conrad の群集は、個人への共感を拒絶する超越的な力なのである。こうした考察から導き出せるのは、モダニズムという文学的潮流が、Le Bon によって定義づけられたような群集と密接な関係を結んでいるという従来の認識ではなく、むしろそうした群集観を峻拒することから始まっているという新しい仮説である。

(3) 本研究はその仮説を実証すべく、19世紀前半から20世紀初頭にかけての小説における群集表象を精査しつつ、並行して当時の群集を巡る言説を、Le Bon を始めとする群集心理学や、新聞や雑誌などにおけるデモンストレーションや暴動に関する記述において調査し、見いだされた相似や相違の中に、モダニズムという文学的現象を規定する新たな因子を探し求めていくことを目的とした。また、Dickens や Gaskell などによるヴィクトリア朝中期の小説も研究対象に含めることにより、小説テキストが Le Bon 的な群集観から次第に離れ、労働運動の発展に伴う同時代の「新しい」群集のあり方に共振していった過程の解明も狙った。以上のような研究内容を通して、群集をキーワードとした、モダニズム文学についての新理論を構築することが、本研究の最終的に目指したものである。

3. 研究の方法

(1) 当時の群集理論の代表的なものとして、Le Bon に加え、Scipio Sighele、Gabriel Tarde、Georges Sorel などによる19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランス・イタリアの群集心理学を研究対象とし、海外の研究機関における文献調査、書籍購入、あるいはオンライン資料ダウンロードなどによる研究資料の収集を行った。

(2) 並行して、Wells, *The Invisible Man*、Hardy, *Jude the Obscure*、Conrad, *The Nigger of the "Narcissus"* (1897)、同、*The Secret Agent* 等の小説作品を対象とし、テキストにおける群集の表象を精査した。その際、各作品の主題との関わりにおいて群集表象がどのような役割を果たしているのかに注目し、群集をキーワードとした作品論の構築を試みた。また、比較対照のため、Dickens, *Barnaby Rudge* (1841) や Gaskell, *North*

and South (1855) にも目を向け、そこに提示されている徒弟や工場労働者による暴動・ストライキの描写が、本研究の扱う 19 世紀末以降の群集表象とどのような相違を有しているかを探った。

(3) 資料の入手方法について、小説テキストの大部分に関しては研究代表者がすでに保有している資料を使用した。個々の作品研究については随時必要な文献を収集して調査に当たった。その際、書籍については新書・中古書の購入を中心に、論文については調査や整理の効率性を重視し、PDF 化されたオンライン資料の入手を中心とした収集活動を行った。なお、後者においては、所属研究機関においてサイトライセンス契約が結ばれている Humanities International Complete や JSTOR、ProQuest Central を通して一部を無償ダウンロードした。群集理論関連の一次資料に関しても、Internet Archive (<http://archive.org>) や Open Library (<http://openlibrary.org>) などウェブサイトを紹介して提供されているオープンソースを積極的に活用した。

(4) 研究の展望を拡大させるため、2000 年代以降のイギリスを舞台とした映画を題材とし、19 世紀末から 20 世紀末における群集の変容がもたらした認識論的变化が、現代社会にどのような影響を残存させているのかを追加検証した。

4. 研究成果

(1) Dickens や Gaskell などによる、ヴィクトリア朝中期あたりまでの小説には、「群集」は社会的な変則的要素 (=anomaly) として現れることが見出された。具体的には *Barnaby Rudge* に登場する反カトリック運動の暴徒たちや、*North and South* に登場する労働者のデモ隊などである。こうした群集は、①「暗示」によって個々の人間が本来有しているはずの理性や個性を喪失し、②「感染性」を通して感情や行動を拡大させ、③ある種の「催眠状態」のもとで活動する、という点において、Le Bon がターゲットとし、定式化を試みた群集と同種の性質を内包している。こうした群集は概して「波」のように膨れあがっては街に押し寄せ、その巨大なエネルギーをもって、制度化された社会の諸要素にとっての大きな脅威と化す。小説の語りにおいては、そうした群集は道徳的に断罪されるべき「悪」として提示され、秩序の回復に向けて進行するプロット上で、最終的に解体され、消失する。本研究テーマを通して、Le Bon を始めとする群集理論家が、群集の社会的脅威やその害悪に対して関心を向け始め、管理・制御する必要性を説いた 19 世紀末に先だって、すでにヴィクトリア朝中期の小説テキストにおいて同種の洞察が内包

されていることが見出された。

(2) 他方で、Wells においては、そうした群集が秩序の破壊者としてではなく、むしろ維持者として立ち現れてくることが明らかになってきた。具体的には、*The Invisible Man* の終末部において登場し、逃走する透明人間 Griffin を追いかける人夫や鉄道夫などで構成された群集のことである。この群集は社会を混乱・恐怖に陥れる「テロリスト」としての Griffin に対峙し、数の力をもって勝利をもぎ取る。そうした展開を通してテキストに持ち込まれるのは、直前までプロットの中心的関心を占めていた Griffin と Kemp という二人の科学者の「個」の物語とは一見して相容れない、群集の物語である。本研究テーマではそうした物語展開に、ヴィクトリア朝中期小説に内包されるものとは別種の、秩序維持者としての群集の役割を読み込みながら、モダン時代のフィクションにおける群集の変遷を辿った。また、そうした変化の背景に、1880 年代後半以降の労働運動の大規模化と成功を重ね合わせることによって、モダニズム文学と社会とのつながりを見出す新しい視座を獲得した。

(3) そうした文学的変遷と群集との関連をさらに探求するために、Hardy, *Jude the Obscure* に現れる祝祭日の群集に着目した。この群集は、何らかの政治的要因を核として形成されたものでも、あるいは強い一方向的な感情によって支配されたものでもないという点において、これまで分析対象とした小説テキストのいずれにも見られない特徴を有する。そうした側面を掘り下げて考察するために注目したのが、テキストに繰り返し出現する新聞への言及である。そもそもフィクションというものが、生来的に「個」の物語への絶え間ない関心を中核に抱えるものだとすれば、この小説においてはそうした「個」の生が、新聞を媒介として、社会を満たす無数かつ匿名の大衆と常に接続されているのである。このようなジャーナリズムを契機として遠隔的に結びあわされた大衆は、Le Bon が自著において「新時代の群集」としてわずかに触れ、後に Tarde が「公衆」(“public”)として再定義したのと同種の存在と言えるが、旧来の群集との連続性を考慮に入れると、むしろ前者のように区分を設けないほうが正確であろう。というのも、Hardy のテキストにおいて明らかのように、そうした大衆の決定力——「個」の生を翻弄する圧倒的な力——は、むしろ Dickens、Gaskell、Wells の描いた群集の圧力と近似したものである。*Jude the Obscure* に登場する祝祭日の群集は、単純な身体的近接性だけではなく、ジャーナリズム的関心を結び目として形成されたものでもあり、旧来の群集から「新時代の群集」へと推移していく過程での、ハイブリッドな「群集」なのである。そうした「群

集」に「個」がいかなる邂逅を果たし、いかなる対峙をしていくかという点こそが Hardy のテキストの基底を成している関心であり、そのような洞察を得ることによって、モダニズム文学と群集の変遷との関連について従来にならぬ理論構築を果たすことが可能となった。

(4) このような新しい様態の「群集」とモダニズム文学がどのような関連性を有しているかをさらに追究するために、Conrad, *The Nigger of the "Narcissus"* を題材として取り上げた。具体的には、作中で集団として提示される船員たちが、船上で発生する暴動の主体としてのあり方と、語り手によって言及される「良き群集」(“good crowd”)としてのあり方との間で揺れ動いていることに注目し、背後に 1889 年の港湾ストライキを経た群集の社会的位置づけの変容があることを見出しながら、テキストの特徴である複層的な語りの発生プロセスについて解明した。加えて、終末部におけるロンドンの雑踏の描写を通して、それまで海上で練り広げられてきた船員たちのロマンティックな共闘のナラティブが、現代的な商業と金銭のナラティブで「書き換え」られてしまうことを見出した。これらの検証を通して、Dickens 的な変則的要素としての群集から Wells 的な新しい秩序としての群集へと推移していく過程が、あるいは Le Bon 的な身体的現前を伴う集合体としての「群集」から Tarde 的な精神的結合を主軸とする「公衆」へと推移していく過程が、初期モダニズム期の小説テキストの形成において基幹的な関わりを持っていることを立証した。

(5) 同じく Conrad の *The Secret Agent* において、新聞を購入する大衆が、さまざまな登場人物たち (Professor, Heat, Vladimir, Winnie など) の行動に、見えにくいながらも大きな影響を及ぼしていることに着目し、新しいモダニズム文学理論を構築する手がかりを得た。そうした大衆は、Professor が恐れるように、旧来の制度に成り代わって、圧倒的な力と堅固さを持って社会を支配するものとして現れてくる。一見すると、本作におけるアナーキズム、あるいはアナーキストたちの描写は、現実世界との間に大きなギャップを抱えているように見えるが、読解の際の主軸を「群集」に移すことによって当時の別の——ただしアナーキズム以上に支配的な——現実の中にテキストを再配置し、新たな評価を行う可能性を見出した。ただ、テキスト中には「商品」としての新聞のあり方が明確に言及されており、さらにその背後には小説そのものもその一角を占める「文学マーケット」の存在が透けて見えてくる。上記の議論の完成度を高めるためには、そうしたテキストの「商品」としての側面に注目しなければならず、研究テーマを拡大しながら継

続して取り組んでいく必要を認めている。

(6) 補完的な研究として 2000 年代以降のイギリス映画に着目し、特に「ゾンビ」を主題とした作品において、Dickens 的な暴動の記憶、Gaskell 的な労働運動の記憶が受け継がれていること、さらには Hardy、Conrad において萌芽的なものとして観察された新しい「群集」(Tarde 的「公衆」)が、ゾンビという形象の中に取り込まれていることを見出した。この成果は、副次的なものでありながら、群集という主題を契機として、19 世紀末～20 世紀初頭において生じた社会的変化が、現代社会の基盤になお潜んでいることを見出すものであり、大きな学術的価値を有している。特に、新聞という情報技術を介して人々が新しい形で結合されるようになったヴィクトリア朝末期と、インターネットという情報テクノロジーを介して人々がさらに新しい結びつきを手に入れつつある現代との連続性を立証した意義は大きい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① ITO, Masanori, “The Modern Crowd and the Palimpsest Narrative in *The Nigger of the "Narcissus"*, *The Conradian*, Vol. 42, 2017 (掲載決定), 査読有

② 伊藤正範、「群衆と 19 世紀イギリス文学」、『商学論究』64 巻 6 号、2017 年、pp. 89～105、査読無

③ 伊藤正範、「イギリスのゾンビ映画と 19 世紀小説における群集表象」、『商学論究』63 巻 4 号、2016 年、pp. 95～113、査読無

④ 伊藤正範、「*The Invisible Man* におけるモダン時代の群衆」、『試論』49 巻、2014 年、pp.19～39、査読有

[学会発表] (計 1 件)

① 伊藤正範、「帆船と初期モダニズム小説：コンラッドと同時代作家におけるロマンス考」、日本コンラッド協会、2015 年 11 月 7 日、関西学院大学梅田キャンパス (大阪府大阪市)

[その他]

ホームページ等

<http://researchers.kwansei.ac.jp/view?l=ja&u=28382>

<http://conrad-soc-japan.org/bunken.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 正範 (ITO, Masanori)

関西学院大学・商学部・教授

研究者番号：10322976